

ごみ減量化モデル事業中間アンケート調査結果

ときがわ町では2つの地区に、令和2年3月1日から、30世帯の方に第2期ごみ減量化モデル地区としてご協力をいただいています。

今後、町全体への取り組みへつなげていくために、協力者の皆様に以下の内容でアンケート調査を行ない、結果を取りまとめましたので報告いたします。

- 1 目的：ごみ減量化に意識的に取り組んでいる世帯の意識や意見を参考にして、今後の事業の展開に役立てて、町全体への取り組みにつなげる。
- 2 対象：ごみ減量化モデル事業の協力世帯（30世帯）
【 春和4区 15世帯 番匠台区 15世帯 】
- 3 期間：令和2年10月8日～令和2年10月21日
- 4 方法：協力世帯にアンケート用紙を直接配布。無記名で回収。
- 5 集計結果

問1 モデル事業を中心で行っている方の、該当するものに印をお願いします。
(無回答 3名)

・性別

男性 8人 女性 19人

・年齢

20歳代 0人
 30歳代 2人
 40歳代 2人
 50歳代 4人
 60歳代 5人
 70歳代 13人
 80歳代 1人

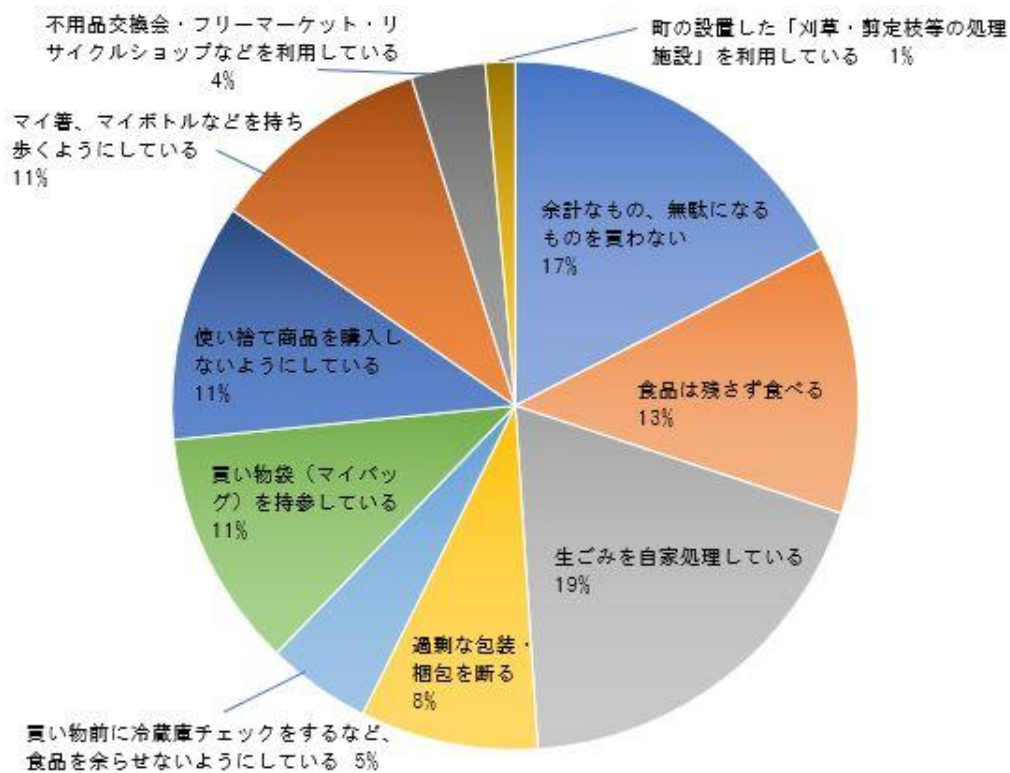
問2 回答者様を含めた、同居しているご家族の人数をお答え下さい。(人)

1～2名 13世帯
3～4名 10世帯
5～6名 4世帯

問3 ごみ減量化の取り組みで、あなたが実行しているものに☑印をお願いします。
(複数回答可)

- 余計なもの、無駄になるものを買わない
- 過剰な包装・梱包を断る
- 買い物袋(マイバッグ)を持参している
- マイ箸、マイボトルなどを持ち歩くようにしている
- 使い捨て商品を購入しないようにしている
- 食品は残さず食べる
- 買い物前に冷蔵庫チェックをするなど、食品を余らせないようにしている
- 生ごみを自家処理している
- 不用品交換会・フリーマーケット・リサイクルショップなどを利用している
- 町の設置した「刈草・剪定枝等の処理施設」を利用している

【ごみ減量化の取り組みで実行していること】



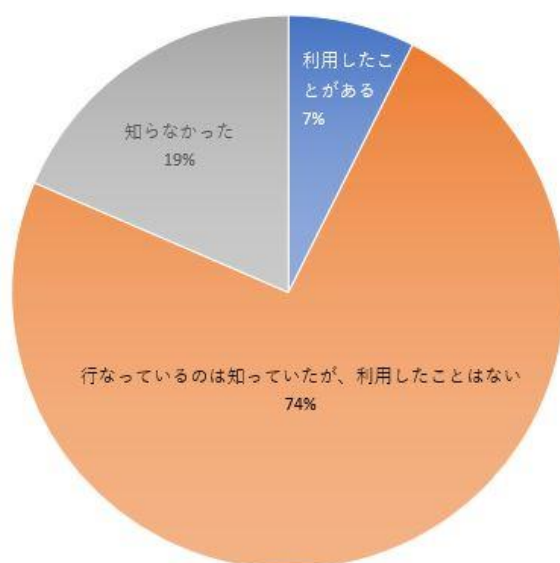
- 余計なものを購入しないことや、使い捨て商品を購入しないようにする等 3Rでも最も優先度の高い「リデュース（排出抑制）」を意識している。
- 食品の食べきり、生ごみの自家処理など生ごみの減量を意識している。
- マイボトルやマイバッグなど繰り返し使用できるものでロスを軽減している。

問4 町ではせん定枝や刈草の受入れを、毎月第2・第4火曜日に行なっています。皆様のご家庭で、該当するものに印をお願いします。

- 利用したことがある
- 行なっているのは知っていたが、利用したことはない
- 知らなかった

※ 今までごみステーションに可燃ごみとして捨てられていた刈草や枝などの減量を目的として令和元年から始めた事業です。(分別カレンダーP20 参照)

【せん定枝や刈草の受入れ施設の利用状況】



- 利用者は7%にとどまっています、知っていたが利用したことがない世帯が74%となっている。次の問5でその理由を検証した。
- 知らなかったという世帯が19%あり。

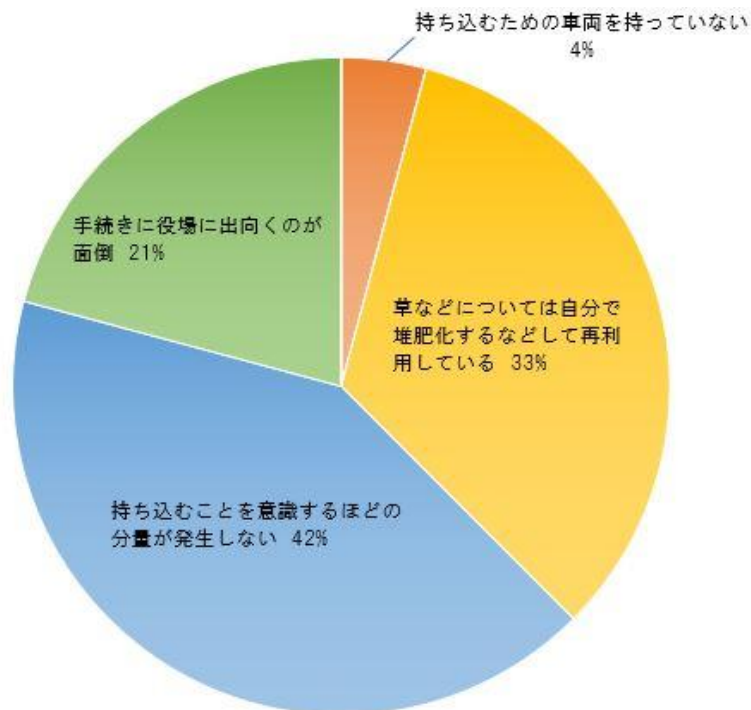


問5 問4で「知っていたが利用したことはない」と回答された方のみ、その理由について該当するものに印をお願いします。（複数回答可）

- 平日に休みが取れないため
- 持ち込むための車両を持っていない
- 持ち込むまでの間、保管しておく場所がない
- 草などについては自分で堆肥化するなど再利用している
- 持ち込むことを意識するほどの分量が発生しない
- 手続きに役場に出向くのが面倒
- 持ち込み場所がよくわからない

※ 山林や農地で発生したものについては対象外となります。
せん定枝は直径 5 cm、長さは 2m までです。
木の枝と刈草は一緒に処理できません。必ず分別をお願いします。
木の枝はしばって、刈草は袋に入れて出して下さい。

【せん定枝や刈草の受入れ施設の利用をしない理由】



- 自分で堆肥化するなどして再利用している世帯が 33%あり、積極的な排出抑制が行なわれている。
- 持ち込みを意識するほどの発生量がない世帯は 42%。
- 役場に出向くのが面倒という回答が 21%あった。

問6 町で行っている生ごみ処理機の補助金についてはご存知ですか？以下の内容で該当するものに印をお願いします。

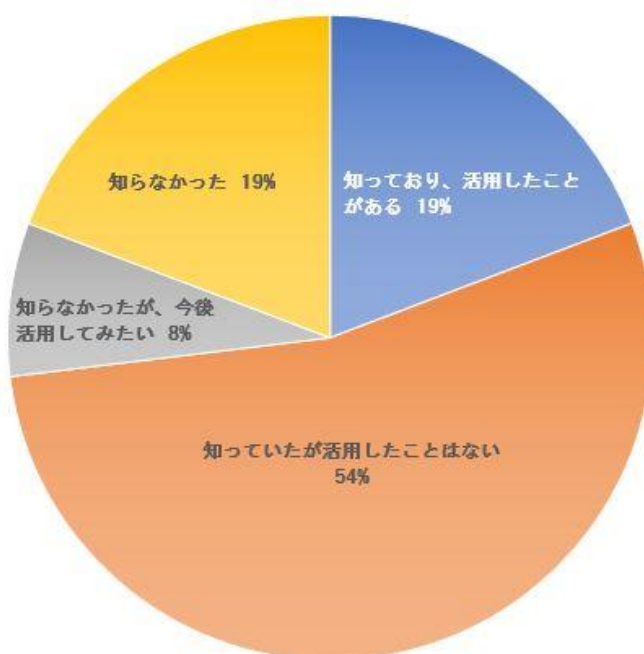
- 知っており、活用したことがある
- 知っていたが、活用したことはない
- 知らなかったが、今後活用してみたい
- 知らなかった

補助額は購入価格の2分の1以内で、補助限度額はコンポスト容器が5,000円で電気式処理機は20,000円までです。

同一年度内に申請できるのは1基のみとなります。

(分別カレンダーP22 参照)

【生ごみ処理機の補助金について】



- 利用者は19%にとどまっています。知っていたが活用したことがない世帯が54%と なっている。知らなかったという世帯は19%であった。

※モデル事業協力世帯で希望者には、開始時にコンポスト容器を1基配布。



問7 モデル事業に参加して大変に思ったことや、苦労されたことがあればお聞かせ下さい。

【 モデル事業に参加して大変に思ったことや苦労した点 】

- 毎回計量するのが大変。
- 慣れるまでラベルを見て分別するのが大変だった。
- ごみ計量を忘れないようにすること。
- 紙類の分別（資源）に気をつかう。
- コンポストを使いはじめました。自分の畑に戻す堆肥を作るので塩分に注意するようにしました。今までは、何でも燃えるゴミで出していた小さな紙類も資源化をするようになりました。参加して苦労とか大変に思った事はないです。
- 重さを忘れずに計る事が大変でした。
- 今まで水切りとかしてなかったのが、少し手間はかかるが、大切なことなので続けたい。
- 記録用紙に記入するのが可燃ごみと雑がみだけなので、思ったより大変ではないです。
- 初めは大変だったが、慣れたら苦にならなくなりました。
- 当初、毎回の計量が面倒なのではと思いましたが、それほどでもなく特に苦労はありません。
- 大変なことや苦労したことはありませんが、家族みんなが減量化等同じ思いで取り組まないといけないのだなと感じ(気づき)ました。(教えないとなかなか分別できない)



問8 町ではごみの減量化を、町全体への取り組みとして広げたいと考えております。

ご意見、工夫している点、お気づきになった点、ご要望、ご提案などがありましたら、ご自由にご記入ください。

【 自由なご意見 】

- 以前からコンポストを利用している。処理機の補助制度についてPRを大いに進めて欲しい。
- 減量した量などは、広報等で知ることができる。資源物などの収益が具体的に何に使われているのかなどを知りたい。
- 町の取り組みとして、町民全員にごみの減量化のアンケートを行う。
- モデル地区を毎年増やしては、いかがですか。
- 今回モデル事業がきっかけで、ごみを減らすことを意識する様になった。家族も雑がみと可燃ごみをきちんと分別してくれる様になった。
- 新聞店、一部のスーパーで新聞・ダンボール・アルミ缶を回収しているが、町へ出せば町の収入になる事を更に徹底する。
- 高齢化に伴い、定期的に住宅付近まで巡回しごみを回収することも検討してはどうか？
- 木の葉・草・刈草の搬入について搬出する状態の明確化-ごみ袋（ビニール）で良いのか？手続きの簡素化-現地でOKにしてはどうか？
- 生ごみの減量について、2~3日乾燥させてから出すようになりました。但し、真夏などハエの出る時期はそのままです。少量の場合は自家空地へ処分しています。
- 今までは、気にしないで燃えるごみの中に入れていた雑がみが、例え少しでもごみ処理の手助けになるのが解りました。少しずつごみを減らせるように努力しようと思います。
- この事業に参加してからは、やはり今までより意識してごみを出す様になりました。
- 紙パックはすすんで切り開いて、乾かしてから出しています。
- 雑がみを可燃ごみに入れないようにしています。
- 資源回収日に雑がみを出しています。
- 皆さんで心掛けて実行すべきですね。ごみ減量につながると思います。
- 今回支給されたコンポストは5人家族には小さく、半年たたずにいっぱいになった。モデル事業を1年間として考えるのであれば、コンポストは2つ必要になる。世帯人数を考慮してコンポストを支給してほしい。
- ごみの分別について、家族内でも年齢によって考え方・取り組みへの意識に差があるので小・中学生に対する啓発に力を入れ、減量化への意識の徹底を図ったらよいと思います。
- モデル事業の参加により、ごみの減量化について、だいぶ意識するようになりました。
- ごみ・資源カレンダーはとてもわかりやすく見やすいと思います。その表示通りに出されず苦労している環境推進委員さんのお話も聞いています。今回のようなモデル事業などを通じ、各地区・各家庭でのごみの減量・分別を意識する機会が多くあるといいと思います。

6 まとめ

ごみの約4分の3を可燃ごみが占めており、可燃ごみを分類すると約4割が生ごみで、約2割が資源化可能なごみ、残りの4割がその他のごみとされています。
全体の約6割を占める、「生ごみ」と「資源化可能なごみ」の減量がこの事業の目的です。

今回のアンケート結果の中で、せん定枝や刈草の受入れ施設の利用状況と生ごみ処理機の補助金の活用状況で「知っていたが活用していない」という回答がどちらも半数以上を占めていました。

せん定枝や刈草の受入れ施設の利用状況については、利用しない理由として「既に再利用している」が約3割、「持ち込みを意識するほどの量が発生しない」が約4割あることから既に積極的な処理が進められていると解釈されます。

生ごみ処理機に関しては、モデル事業協力世帯で希望者には、開始時にコンポスト容器を1基配布し、活用している報告もあることから既に物があって活用しているために「補助金」の活用をしていないと回答された世帯が5割近くあったと思われます。

以下のグラフは令和2年の11月までの実績を反映させたものです。

コロナ禍による巣ごもり生活があったにもかかわらず、モデル地区では町全体と比較しても、最大24.6%の削減がされており、意識して減量に取り組むことで、減量効果が表れることが読み取れます。

一部の地域だけでなく、町全体の取組みに拡げていくことでより大きな効果が期待できます。引き続き、皆様のご協力をお願いします。

